

器械並小荷駄附糧米

兵器というものは繁多にして、ことさらに種々の制度、寸尺、秘密伝授等の習わしがあるけれども、あえて拘こたわるまでもない。最初に云ったように、物ごとには本末がある。そこで兵器の本末を云えば、太刀たちは丈夫で切れ味が良く、鎗やりは太くて通りが良く、甲冑さねは札さねが良くて軽く、馬は脚や爪が丈夫で物に驚かず、これらが本である。柄つかや鞆さやの造り様、絵柄や模様、柄の削り様、石突の仕附、緘おとしげ毛、小道具の習い、相形、旋毛等の掟は末である。あらゆる事は皆、本をよく会得して、末は大略だけにしておけ。さて又、昔は存在して、今は存在しない兵器がある。弩ど、角等かくである。又、昔は兵器に用いて、今は兵器に用いないものがある。熊手、大鎌、大棒の類である。これらは皆、利用価値が高い兵器なので、志ある将帥が時として採用すれば、必ず有利になるだろう。左に兵器のいくつかを記す。さらに工夫を加えて製作すべきである。

○刀は丈夫なものを用いよ。どこ・誰の作であるかに拘こってはならない。ただし二箇所、目釘か、あるいは堅木柄であること。詳しいことは一騎前で記してある。

○特太刀あるいは野太刀とも云う。これ又、一騎前に記述がある。

付記 片刃を刀と云い、両刃を剣と云うのである。刀剣の類、その構造には国々で差異がある。支那は剣である。その構造は鎗しのぎ(び刃の背に沿って小高くなっている部分)が厚くて、長さは一尺二〜三寸(約三六・四〜約三九・四cm)から六〜七寸(約四八・五〜約五一・五cm)までである。二尺(六〇・六cm)に及ぶものは少ない。オランダ及びヨーロッパ諸国も剣である。その構造は鎗が薄くへなへなどしなあって、長さは概ね二尺余りである。ただ刺すことを主として切ることをしな

い。その切である先二寸（約六・一cm）程に毒薬を塗っておく。勃泥国（フィリピン）は刀である。その構造は日本刀の形であるが、ただ薄い。鋸のこぎりのようになる。これらの諸国は皆、右手に刀剣を持ち、左手に楯を持つという片手討ちの戦法なので、その刀剣及び楯の軽さを重視するのである。

○又思うに、オランダの書で五世界諸国の人や物を凶入りで紹介する中、某国人の驍ぎょうゆう勇と称する風俗は、皆刀剣と小楯とを身から離さずに所持する姿である。これは我が国が両刀を帯びる掟と同じく、勇氣のいたす風儀であるには違いがないが、その楯を頼みとする心根は甚だ弱い。日本風の「首など敵に渡して、斬り込む」という勇猛さに、どうして対抗できようか。

○又思うに、剣に毒を塗り、鏃やじりに毒を塗ることは、皆その技が拙つたないものであり、一討ちに斬殺し、一矢に射貫くことができないため、小さな傷でも毒により意識を失うように計ったものである。日本のように一刀に胴切り、一矢に射貫くのであれば、どうして毒に頼る必要があるか。にもかかわらず俗人の癖として、毒矢と聞けば甚だ恐れて、拙さゆえに毒を用いると云う道理すら知らないのである。愚かといふべきか。さて、私自らが見たところの三つの刀剣を左に紹介する。

唐山劍



阿蘭陀劍



勃泥刀



鐔より柄頭へ延つけにして拳よけの鉤あり

楯もただ面を防ぐための物であり、その構造は甚だ軽くて薄くできている。その形は丸も長方形も四角もあり、好みに応じて用いる。

○弓は半はんきゆう弓が良い。もちろん突き通す力も強いものである。角弓は最も巧妙である。ただし製造法を精密にしなければ、弾く力が弱い。その製造法は『武備志』に詳しく書かれている。又、弓の専門家にもまれに知る人がいる。尋ねて問うて造っておけ。又、急を要するときには、ナマエ、ソゾミ、檜等の丸木弓を用いよ。

○平素の稽古に具足を着けて、塗弓根矢を射ることを修練せよ。当世の射術は奉射（神社で奉納する弓射）の弓法なので、白い弓と軽矢を用いて、片肌脱ぎにて射るので、大いに射易いのであるが、これは平和な世の礼射であって、武芸の奥の手であるから、まずはその基本となる武用軍中の射術を射覚えてから、その後に奥の手の礼射を習うのが正しい手順である。片肌脱ぎの射法だけを射習って、にわかにも具足を着けて射るならば、平素の上手も下手になるものである。これは慣れていないからである。誰もが分かることであろう。

付記 仙台の国中には「カマボコ弓」と云うものが多い。また十万打とも云う。伝えられるには、藤原秀衡が武備のために製造したものであるとされる。

カマボコはその形状によって名付けたのである。十万打は地名である。高館の下に十万坂という所がある。この地に弓工を居らせて十万挺を作らせたので、十万弓と云うのだとされる。その構造は、白い弓にして外竹のみで、打合わせる内竹がない。それでも雨露は云うに及ばず、水中に入れても離れて損することがないので、甚だ重宝なものである。ただ、その弓材は粘り気が非常に強いので、今では廃れてしまった。できれば再興させたい弓である。

○私が思うに、その膠にかわは普通の膠ではない。漆打のように思われるのである。又思うに、竹木を打ち合わせるのに漆木うるしの下で、漆をか抓き取りながら、葉を合わせて物を接着させると、その粘着力は甚だ強い。もしかしたらこの類ではなからう

か。試してみよ。薬はすなわち麩粉べん（小麦粉、小麦粉、うどん粉など）である。

○矢の製造は矢を造る職人だけに任せておいてはならない。戦場に出るほどの者であれば、美しく作ることはできなくても、曲がった矢竹を真直ぐにし、羽を付けることは、皆が仕覚えておくべきであり、これも又、平素の軍政としなければならぬ。

付記 急に矢を作るには、どんな竹であっても真直ぐにして、矢筈やはず（矢の端の、弓の弦につがえる切込みのある部分）から六〜七寸（約十八・二〜約二十一・二cm）下に穴を穿って、その穴に幅一寸（約三cm）長さ八寸（約二四・二cm）程の紙を引き通し、矢筈の方に引き返して射れば、羽があるように飛ぶものである。

○弩は甚だ強力で、その上に命中精度も高いものである。しかしながら今は絶え果てている。できることならば再興して、鉄砲の代りに用いたいものである。火薬を節約できる良い器材である。古代には筑紫、長門、奥州等の辺境の要地に弩師と云って、弩いしゆみぐみ組の武士を置いていたことが、諸史に見られる。考察すべきである。

○矢籠の製作について、これも一騎前（第六卷「撰士 附一騎前」）に記してある。

○オランダ流に大矢を弾く柱弓がある。詳しく初巻（第一卷「水戦」）に記してある。これも又製造すべきである。

○大砲に各種ある。これも又初巻に詳しくある。

○木筒、煉玉等がある。これも又初巻に出ている。

○棒火矢がある。これも又初巻に詳しくある。

○鎗は長短同じではないものを用いるが、普通の人は短いのが良い。力のある人は長いものを用いれば大いに得である。ただし、どの鎗も三寸（約十cm）を穂先とせよ。

○大太刀と云って三尺（九〇・九cm）内外の刀に三四尺（九〇・九〜一二一・二cm）

の柄を仕付けて、力持ちの武士に持たせて働かせよ。

○大棒は後部と先に鉄を張れ。これも又、力のある人に得な道具である。

○大鳶嘴とびくち、これも又、力のある人に得な道具である。

○長柄の鎌、特に船軍で大いに有利である。

○鞍について、これは馬の条で後に紹介する。

○障泥あおりについて、これは一騎前にて紹介した。

○楯に種々の製法がある。厚板で造るものがある。又、薄板で厚さ二寸(約六cm)程の平らな箱をこしらえ、その中に綿や打藁等を込めるものがある。又、魁籐まるとうを八〇九

筋ごと簀むしろのように編んで、二枚合わせて作るものがある。又、藤蔓ふじつるでそのように作る

ものもある。又、一寸五六分(約四・五〇約四・八cm)の角木で枠をこしらえ、両面に生牛皮を張り、その中間に綿を入れるという布団のようなものを下げしておくのである。これが楯の極品である。又、仕寄楯、持楯にも大小各種ある。大楯は高さ五尺

(一五一・五cm)余、幅六尺(一八一・八cm)程で、足に車輪を取付け、大勢で持ちながら寄せるものである。小楯は高さ三尺(九〇・九cm)弱、幅一尺(三〇・三cm)

余に作り、裏に持つ所を付けて、人毎に自ら持って詰め寄るものもあり、一本足を取付けて、地面に突立てるようにこしらえるものもある。それぞれ用いる場合があるので、よく考えて用いよ。又、支那、オランダの軍法に藤牌と云うものがあり、戦法で巻(誤り、正しくは、第二巻 陸戦)で紹介している。又、足輕に持たせるのに、一枚楯に穴を穿ち、鉄砲を貫いて持つようにこしらえるものもある。楠木正成は、掛金を打ちつけた楯を用い、又長楯に横木を打って梯子の代りにする楯を用いたこともある。

総じて楯の構造は軽くして、矢石が抜けないように出来ていることが極意であると

知れ。

○鳴物は貝、太鼓、鐘等に限らず、音の異なる物は何でも用いよ。吹く物にも貝、角、大音喇叭、長声喇叭等の区別がある。工夫して製作せよ。

右の他にも守攻の具は種々あるが、各条下に記してここには載せない。全て兵器及び攻守の具は、創意工夫して新たに製作すべきであり、それは大将の器量次第である。そうは云えども、無学であつては才覚も良い考えも出てこないので、せめて和漢の通俗軍談物でもよく読んでおかねばならない。助けとなるものである。

小荷駄 糧米

○小荷駄は支那では輜重しちようと云い、三種類ある。車に載せるものがあり、牛馬に付けるものがあり、人が担うものがある。全て小荷駄は軍の根本いんきそをなすものであるから、支那の軍法では、輜重を軍の中央に置いて、片端には置かないとされている。

○日本風に小荷駄を一番後に置くのは、こうした本意を失することになる。その理由は、不意に敵に攻められるときは、小荷駄だけが襲われて消滅することになるからである。考慮すべきことである。

○小荷駄は糧米並びに炊事道具、その他の陣用（陣内用具）である。陣用はできるだけ少なくし、多ければ寒気を防ぐための桐油、木綿の桐服一つを用いるようにせよ。いずれその場に臨んでは、寒気が強くても菰こも、むしろ、藁わら等の類を引つ被れば事足りるものである。もつとも長陣には虱しらみが雲霞のごとく生じるものであると云われる。これらのことも覚悟しておけ。

○小荷駄が平地を進むには車に勝るものはない。その次は牛馬を用いる。急いで難所を押し行くのであれば、歩荷かちが便利である。もつとも重量の見積りも予め定めておか

ねばならない。歩荷は米ならば一斗（約十八ℓ）程度、雑具であれば六貫目（二二・五kg）を限度とせよ。馬は強ければ米六斗（約一〇八・二ℓ）弱ければ四斗（約七二・二ℓ）程度、雑具であれば二十貫目（七五kg）を限度とせよ。牛も馬に準ずるものとする。車は強馬が四頭分の荷を載せて、牛ならば一匹、人ならば四人で押すのである。また、一人の食糧は一日一升（約一・八ℓ）と見積って、一斗の米は十人一日の食糧である。じ余の物はこれを推して知るべし。

○糧米は兵糧奉行の手配により、全兵士の手割渡すものである。その方法については後述する。

○陣用の荷物は、一組毎に寄せ合せて印を付けよ。たとえば陪卒無しの人数组であれば、五伍二十五人が寄せ合つて一箇こおりにまとめておき、番頭、百人頭、小組頭の姓名を書き記し、並びに一組の印を付けておけ。又陪卒がある人数组であれば、一伍五人の寄せ合いで箇こおりにしておき、三頭の姓名並びに一組の印を付けておくこと。

○前進中にも、陣地にあつても、小荷駄を守る兵士を別に定めておくこと。この人数の多寡は当時の状況によるものとする。

○自国を遠く離れる程、あらゆる事が不自由になることから、小荷駄を警護することで、襲撃され壊滅しないように考慮せよ。これまでが小荷駄についての大略である。これ以下は糧食について述べる。

○『孫子』に「糧は敵に因る」とあり、敵国に攻め入ったならば、その国の穀物を取り収めて、我が軍兵の糧米に充てることである。そうは云えども、妄りに乱暴して民間の物を掠奪するというのではない。国主の穀物や絹織物等の貯蔵場所を取るのがある。しかしながら、仕組まれたかのように、敵の倉庫も首尾よく取られてしまう

ものではないので、糧食不足の時は、民間の穀物を借りることになる。当時の状況によつては、やむなく乱暴により穀類だけを取り上げることもあるだろう。その時は目付役人等を付添わせて、必ずや他の物を取ることを禁じよ。もしも命令に背く者があれば、その場で切捨てにせよ。もつとも将帥の下知が無いのに強奪をする者は、乱妨（＝暴力により他人の物などを奪い取ること）の罪とせよ。

○敵国に攻め入って厳しく禁じなければならぬのが軍士の乱妨である。このように乱妨を厳しく禁じる趣意は、戦に勝つて敵国を手に入れてみれば、敵が乱妨していた所も我が物になるのであるが、初めに発生した乱妨に国人が怨みを抱いて、我にも信服しないものである。それゆえに乱妨を禁ずるのである。そこで穀類を借りるときには、番頭、百人頭等の券書てがたがあらねばならない。もしも敵国が手に入らなければ、正直に返すにも及ばないこともあるかもしれないが、再び敵国に踏み入るためや、たとい踏み入らなくとも信を敵国に失うことを憂慮する者であれば、返すこともあるだろう。今、一定には言い難い。又、清野の術と云うことがあり、城下の穀物や絹織物も、民間の穀物や絹織物も、ことごとく城内に取り収めて、一粒も敵に渡さないようにすることがある。このような時は、いよいよ自国から糧米を運び続けなければ、手に入りかかった国を取り逃すことにもなる。このゆえに、粟を貯えることは国主、知行持等の第一の心掛けと知れ。『王制』にも「三年之蓄無くんば、國其の國に非ず（三年の蓄えが無ければ、その国は国家に値するものではない）」とある。よく考察せよ。

○いかなる場合にも陣中において飯を炊くのに、釜は不便なものである。銅鍋が良い。鍋は取手があるので、どんな物にも掛けることができ、又物に触れても鉄のように破損しないので、銅鍋を用いるのである。

○糧米は一人に一日一升（約一・八ℓ）とする。味噌五勺（約九〇ml）、塩一つまみと見積れ。味噌を用いるのは上級の軍役である。多くは飯と塩だけである。

○糧米を総軍に渡す方法は、先ず兵糧奉行の居場所を虎落（もかり）（||竹を筋違いに組合せ、縄で結び固めた柵）で囲んで口を二ヶ所設け、一つを入口、一つを出口と定めて入口、出口と大札を立てる。そこで前述のように、陪卒無しの人数組であれば、五伍二十五人が一同に受取らせる。陪卒がある人数組であれば、一伍五人で陪卒の数を計算して、一同に受取らせる。長陣であれば、三十五日分を一度に渡すこともあるだろう。そうして受取るときは、番頭誰組某、幾人分と札を書いて持参し、米穀と引替えにせよ。

○大軍であれば、兵糧所が一ヶ所では不足するものである。人数の多少を考慮すれば、三ヶ所も、五ヶ所も、あるいは十ヶ所も必要となろう。ただし一ヶ所で三千人に渡すものと見積れ。
この際、旗本の兵糧所、何備の兵糧所ということを定めよ。そうしなければ二重取りが生じる。

○米を渡すには、虎落（もかり）の中に渋紙あるいは蓆等（むしろ）を敷いておき、米を散らし、算勘、帳付が二人ずつおり、升起りが六人いるようにせよ。この際、一斗升を用いる。

○鍋は鍋だけを別荷物にして車馬につけて、「鍋」と染めた小旗を指し立てよ。着陣した後、陣中の小路々々を持ち廻ってこれらを渡す。陪卒無しの人数組であれば、五伍二十五人に二つ渡し、陪卒がある人数組ならば、一伍五人に二つ渡すのである。

○薪と水は自分たちで支度するものである。その方法は陣取の巻に記したとおり。

○行進時と接戦時は、皆が腰兵糧（携行糧食）とせよ。少なくとも五合飯を携行せよ。

○陣所に到着して飯を炊こうとしている時、急に戦が始まって軍士が皆打って出るならば、一組につき五人ずつ居残り、急いで飯を炊いて戦場に送れ。もつとも大将自らが十分に配慮して、兵糧の世話をすべきである。

○陣中であつては、戦が無い日でも一日分の飯を同時に炊いておくのが便利である。冬は二日分も炊いておけ。飯が冷えたならば、沸湯にえゆの中に入れて食べれば、温食となる。焼味噌、乾味噌等を多く食べれば、別に味噌汁を煮る必要も無い。とかく衣食住の艱難は、平和な日においても楽しみながら折々試みて、心得ているようにせよ。

○陣中での飯煙めしけむりは、多い少ないを不斉一にして立てるようにせよ。上杉、武田の川中島対陣の時、武田軍が夜にまぎれて人数を廻すための支度に、その日の夕方一同に飯を炊いた。上杉軍がその煙の常より多いのを見て、武田が人数を廻す支度であることを察して、遮ってこちらから人数を廻すことで、武田を大いに困惑させたのであつた。兵を担う者は心に留めておけ。

糧米が尽きた時、糧に用いる品々

○塩を加えて十分にぐつぐつと煮れば、草木の葉で十種のうち九種は食べられる。

○諸木の内皮及び根も又、塩を加えてぐつぐつと煮れば、食べられるものが多い。

○普段食べ慣れている野菜類は云うに及ばず、百草の根及び葉、茎ともに上述したようにして食べることができる。

○鳥獣魚貝の肉も又、十分に煮込んでから食べよ。

○炒めて食べれば、糠ぬかや藁の類も皆、飢えを救う。もつとも麦稗などの茎も炒めてから細かい粉末にし、湯にかき混ぜて飲むとよい。

○十分にぐつぐつと煮れば、革道具さえも食べることができると云われている。

○加藤清正の家士は、蔚山籠城うるさんの時、食糧が尽きてやむを得ず、壁土を水にかき混ぜて呑んだことがある。その艱難は推して知るべし。これは虫の息でもなお存する限りは敵に降伏せず、との義氣の一念である。

○飢餓の極限に及ぶときは、人肉を食うことがあるだろう。これは不仁甚だしく、言語に絶するところであるけれども、時勢によっては遁れ去るべき手段もなく、又絶対に降参することもできず、又自害や討死も犬死に準ずる趣意があるならば、人肉を食べてさえも一日でも生き延びようと判断することも、いくさ軍をする上では覚悟しなければならぬという考えも一理あるのだ。

右の他にも海には昆布、ヒジキ、アラメ、ワカメ等の海藻がある。山には石麩せきめん※、観音粉等がある。これらは皆、食べて飢えを救うものである。捜し求めてみよ。

※石麩 石川郡の鶴来にある氏神の祠に、土地の者が大飢饉の際に祈ったところ、空から石のような白いものが落ちてきて、それを食べると甘くて乳のようだったという。おそらく、ジャイアントパフボールというキノコであろう。観音粉も同じような言い伝えのある食べ物。

○飢えた人に食物を与えるには、先ず赤土を水にかき混ぜ、お椀に半分程の量を飲ませた後、食物を与えよ。又、ほおのき朴（モクレン科の落葉高木、葉は殺菌作用があり、樹皮は生薬にする）の皮を煎じてお椀一杯分を飲ませた後、食物を与えよ。この二つの方法を用いずに直に食物を与えれば、たちまち死んでしまうものだと言われる。